

## 「カブトムシさんにずーっと触りたかったんだ！」

山鳩保育園（京都府八幡市）

<1歳児>

8月初旬から飼育を始め、初日に「触ると痛い！」と知り、2日目には「カブトムシは夜うちを散らかすけど、掃除はできないからきれいにしておける」と気が付き、10日目には「じっとしているだけでなく、飛ぶ」姿を見ることができた。カブトムシへの興味から、どの子も飼育ケースは一日一回は覗き込み、「中に入ってるー（土の中にもぐっている）」「すいか食べてるで」「せんせい！また、グチャグチャやでー」とその都度の発見を一生懸命、言葉や手振り、身振りで、保育者に知らせにきてくれる。子どもたちの楽しくて可愛い「つぶやき」は毎日続いていた。

**【新たな発見】** そんなある日、飼育ケースを覗きこむと交尾しているオスとメスを発見！すかさず、クラスで一番カブトムシが大好きでおしゃべり盛んなA児に「ねえねえ、カブトムシさんがおもしろいよー。みてごらん」と保育者が声をかける。聞くなり飼育ケースにとんでいったA児の口から「せんせい！せんせい！カブトムシさんおんぶしてるわー」と、期待通りの可愛い「つぶやき」が聞かれ、その声に他の子も素早く反応して飼育ケースに集まってくる。0才児クラスのおんぶを見慣れている子どもたちは、やっぱり同じように「おんぶやー」「おんぶしてるな〜」と初めて見るカブトムシの姿が嬉しいようであった。

この日以降、カブトムシさんの「おんぶ」が度々見られるようになったが、この「おんぶ」と同時進行でカブトムシと子どもたちの“お別れ”が始まっていくことになる。

**【カブトムシの死】** ある朝、いつものように子どもと一緒に飼育ケースの“お掃除”と“ごはん”の用意をしようとする、カブトムシのオスの様子がいつもと違う。触れてみても全く動かず、つまんでもやや軽く感じる。

まさか、こんなに早く死ぬとは思っておらず、保育士自身、少しショックを受けながらも、「カブトさん、死んでるわ…」と掌にのせて子どもたちに見せながら知らせる。異変を察した子どもたちが集まってきて、意味はわかっていないけど、今、聞いた「死んでいる」という言葉に反応して「死んでるの？」と保育士の掌の上で動かなくなったカブトムシをじーっと真剣な表情で目を凝らしてみつめている。A児はカブトムシの反応をみるように触れたり、突っついたりし、周りの子どもも先を争ってカブトに触れる。そして一人の子が保育士の掌のカブトをサッと奪うように自分の掌の上ののせ、それを見たA児が怒りだし半泣きになる。同時に他の子どもも次々と手をのばす。



そして、予想もしなかった「カブト争奪戦」になる。

<分析>

「いつも保育士がするように、ず〜っと大好きなカブトムシを自分の掌にのせたかった」「見るだけではなく、触りたくて仕方がなかった」という思いが表れて「カブト争奪戦」になったと思われる。カブトムシと初めて出会った際に、「カブトムシに触ると痛い！」という学習をしているので、毎日の世話の際も誰ひとりとして触ろうとせず、たまに保育士が掌にのせてあげようとしても「いらん！」と逃げていたが、「死んでしまった」「もう動かない。触っても痛くない」「今なら触れる」「もう触れなくなる」など様々な思いになったこの状況で、子どもたちの姿は一変した。保育士が戸惑ってしまうほどの様子だったが、カブトムシへの素直な思いが表れている。

保育者は「じゃあ順番ねー」と、子どもたちの掌の上にそっとのせてあげる。どの子も緊張の面もちで小さい掌を広げ、カブトムシがその上にのると「はあ〜っ」と感嘆の声をあげたり、「わあ〜！カブトムシさんやー」と満面笑顔で嬉しくて仕方がないという様子、中には、鼻を近づけカブトムシの臭いを嗅ぐ子どももおり、「何の臭いがする？」の問いかけに「カブトムシさん！」と可愛い返答が…。

そして、二度目、三度目の順番が廻るころには保育士の仲立ちも必要なく、子どもたちの掌から掌へとカブトムシが移っていく。そして、そろそろカブトムシさんも土の中で眠らせてあげることを話そうとしたら、「可愛いなー」「お腹がいい？」「一緒やなー」と楽しそうな会話をする子どもたち…。その子どもたちの掌をみると、ひとりは頭、もうひとりは胴体と、並んでお互いの“変身したカブトムシ”を



得意気に見せ合っている。それを「順番！」「順番！」と言いながら待つ姿もある。

「死んじゃっているカブトムシを触りすぎると、壊れて可愛そうやねー。もう、土の中に埋めて寝かせてあげようね」の言葉に嫌々ながらも保育士に差し出し、カブトムシをどうするのかなという表情の子どもたち。

そして、保育室前の花壇横に一緒にスコップで穴を掘って埋めた。その時、ひとりの子がバラバラの頭と胴を合わせてあげ、「先生、こうすんの？（これでいいのかわかるの？）」と保育士に同意を求める。

そして翌日から、メスのカブトムシをみて、やっぱり触りたくて、いつになったら触れるかどうかをじっと観察している子ども、また動かなくなっているのではないか思い、心配そうに「死んでる？」と、保育士に尋ねる子どもがいる。

**<分析>**1才児というものは、毎日世話をし、一日何度も観察した「カブトムシさん」は、どんな姿になっても今までと変わらない大好きな「カブトムシさん」なのだ。“生き物を玩具扱いなんて…”と響きを買いそうな姿に戸惑ったが、カブトムシが今の状況になったからこそ直接接触し、最後まで五感をフルに使って自分の掌の中のカブトムシを感じている場面も“科学する心”の芽生えなのかもしれないと感じた。

いよいよ埋めるという作業の時点で、元の体に戻している幼児がいることで、子どもたちは「カブトムシの命の終わり」に気づいたのではと感じられた。ひとつの出来事が起こるたびに、1才児の子どもたちなりのカブトムシの観察する観点が変わってくる。

**[カブトムシの卵]** 何日かが過ぎて、とうとう六匹目のカブトムシがいなくなった空っぽの飼育ケースを覗き込み、「これって、ひょっとして卵かなー」と保育者が言うと、「えーっ！！」、「ほんとに一」と子どもも少し透明感のある乳白色の約1ミリぐらいの“物体”を凝視する。何粒かそれらしきものが見えるので、本格的に“卵”探しをする。



保育室の真ん中に新聞紙二枚を広げ、その周りを子どもたちが囲み見守る中、飼育ケースをそっと逆さにして土を全部出し、慎重に広げる。そして割り箸で卵を探る。その間、割り箸の先をみつめる表情は真剣そのもので、誰かの腕がおおいかぶさって少しでも割り箸の先が見えないようなものなら、体勢を変えて見ようとしている姿がある。

探索の結果、はっきり卵ではと思うものが、3、4個、あとは、それらしきものが何個か見られる。子どもたちには、カブトムシが卵を産んだこと、卵というのは大きくなったら、カブトムシになるということを話して聞かせる。どの子どもも真剣な表情で聞く。

**<分析>**卵を探す意味はわかっていないようだが、あのカブトムシさんに関係があることはよくわかっている。

**[その後]**もう一度飼育ケースに戻し観察を続けることにする。この1歳児クラスで生まれた“卵”が5歳児クラスの「虫グループ」の子どもたちによって飼育され、幼虫からさなぎ、成虫となり、現在、山鳩保育園のカブトムシは3代目となる。

### みどころ

1歳の子供たちは、カブトムシという生き物の世話をすることで色々なことを感じていたと思われます。しかし、死んだことで「このカブトムシは掌にのせることができる」と感じ、それまでにはない「カブトムシに触りたいという欲求」が表れました。「触れる」という当初の欲求を満足したことで、新たな気付きやかかわり方が引き出されました。思ったように素直に行動に表し、凝視したり触れたりして自分からかかわることで、改めて「死んでいる」ということを実感したと思われます。保育者の言葉や動きはモデルになって、子どもたちの活動に大きく影響しています。この事例では、保育者が子どもの行動や欲求、「心の動き」を受け止めて、子どもたちが気持ちを向けた対象にしっかりとかわれるようにすること、そして、思ったこと気付いたりしたことを表せるようにすること、簡潔で分かりやすい言葉や動きでモデルを示すことで、「死」や「命」についても、1歳児なりに感じる経験をすることができました。